

助産師教員の教育能力に関する研究

我部山キヨ子, 柳吉 桂子, 谷口 初美,
眞鍋えみ子*, 倉本 孝子**, 高田 昌代***
(全国助産師教育協議会組織小委員会)

Teaching Ability of Instructors Belonging to Midwifery Schools

Kiyoko KABEYAMA, Keiko YAGI, Hatsumi TANIGUCHI,
Emiko MANABE*, Takako KURAMOTO**, Masayo TAKADA***

Abstract : The purpose of the present survey was to evaluate the teaching ability of instructors working in midwives' schools.

A questionnaire survey on teaching ability (five types of ability: designing academic subjects, developing curriculums, developing educational methods, supporting students, and educational evaluation - 23 items) was conducted, involving 238 teachers in midwifery working for vocational schools and college-related educational institutions, and the results were analyzed according to the educational institute, position, and period of experience.

1. Regarding instructors in midwifery working for vocational schools and college-related institutions, teaching ability scores obtained by teaching staff in high positions and with many years of experience were high, which suggested improvements in their teaching skills. There was no marked difference in the teaching ability between the two groups.

2. Scores for most items received by assistants and associate professors working in college-related educational institutions were lower than the standards. They are required to undergo structured training after being recruited.

3. The ability to support students was high in teachers working for both vocational schools and college-related institutions, and even those with one or two years of experience. This is regarded as an essential ability that all teachers are required to have.

4. Regarding abilities for developing educational methods, designing academic subjects, developing curriculums, and educational evaluation, teachers with more than six to ten years of experience received scores higher than the standards. This suggested that it takes ten years or longer for teachers to develop a standard level of general teaching ability.

5. There was a significant correlation ($r=0.482$) between their teaching experience (expressed as the number of years) and total teaching ability scores, whereas their clinical experience was not related to the total scores.

Conclusion

It is important to establish an "educational ladder" (to develop practical teaching skills) and training (for newly recruited midwifery teachers) systems, as measures to help teachers develop the required teaching abilities in a structured manner, in order to maintain and improve the quality of midwifery education.

Key words : midwifery education, teaching abilities, educational ladder

はじめに

昨今、看護系教育機関の増加に伴い、教員不足とともに教員の能力への疑義が論議されているが、助産師教育機関においても例外ではない。また、教員となっ

た助産師が、どのような道筋で、どのような能力を身につけて行くべきか等教員のキャリア構築についても決まったルールはなく、個人や組織に任されているのが現状であり、教育機関や教員個々によって、教員の能力には差が生じている。

近年、教育現場においてははじめ、登校拒否、学力低下など様々な問題が提起され、緊急の対策が叫ばれている。このことは看護教育においても影響が見られ、入学者の学力の幅の拡大が多方面で指摘されている。これは、3年課程看護師学校養成所に入学した大卒者数や社会人の増加¹⁾など、年齢層や社会背景も多様化していることも一因と考えられ、看護教員がその集団をいかに把握し、指導するかも大きな課題となってきた。また、看護教員の業務は講義・演習・実習指導が第一義的な役割であるが、専門学校の看護教員の業務は、大学や短期大学の教員に比べ、学校行事や学生の生活指導などのその他の業務に多くの時間を費やしていると報告²⁾されているが、職業教育の要素が強く、かつ実習時間が長い助産師教育においては、専門学校だけでなく大学教育においても、教員には様々な業務の履行が要求されている。

看護教育や看護教員の質の検討等については、文部科学省・厚生労働省等の関係省庁において、様々な検討が進められてきた。看護基礎教育のあり方に関する懇談会(2008)では、中長期的な未来を念頭に看護職員に求められる資質・能力が検討され、看護基礎教育の充実に向けた教育期間延長と大学移行の方向性が示された。今後の看護教育のあり方に関する検討会報告書³⁾では、看護教員の資質や能力の維持・向上に向けた課題改善の方向性が示され、質の高い教育を実施するためには、教員には看護実践能力と教育実践能力の両者ともに必要でそのバランスが重要であること、専門分野の研究に関する最新情報を収集し、教育に活用できる能力や日々の教育活動の中に課題を見だし、研究に取り組む能力を育成する教育も重要であることが報告された。

一方、教員に必要な資質や能力についての研究を概観すると、国内における調査は、初等中等教育機関の教員を対象として行われてきた^{4,5)}。看護教員を対象とした調査は、看護教員の臨床能力^{6,7)}、職務成長に寄

与する因子⁸⁾、専任教員の資質向上に向けた取り組み⁹⁻¹¹⁾、FD¹²⁻¹³⁾に関する調査などで、方法論も質的研究が中心で対象数も10人程度と限られている。国外の調査においても、看護職の教育¹⁴⁾やキャリア形成¹⁵⁾などの研究が主流で、国内外ともに、助産師教員はいうまでもなく、看護職教員の資質や能力の実態を調べた報告は見当たらない。

このような背景の中で、教育の質を担保する基盤として、教員の経験年数に合わせた標準的能力を調査し、その実態を見据えた助産師教員の教育実践能力習熟段階(educational ladder)試案を作成することは喫緊の課題である。

本調査の目的は、助産師教育の質の向上を図るための基礎資料を得るために、多様な助産師教育機関で働いている助産師教員の教育能力の実態を明らかにすることである。具体的内容としては、以下の2つである。

- 1) 教育機関別教員(専門学校・大学系)の教育能力の実態を明らかにする。
- 2) 教育経験年数別教員の教育能力の実態を明らかにする。

方 法

1. 対 象

対象は全国助産師教育協議会に加盟している助産師養成機関126課程に在籍する教員604名である。604名のうち、回収できたのは240名、その内有効な回答は238名(有効回収率39.4%)であった。

2. 方法：郵送による質問紙調査

全国助産師教育協議会の理事会の承認を得て、各教育機関に登録されている教員数の調査用紙を教育課程長に調査の趣旨などを記載した依頼文とともに郵送し、課程の教員に配布を依頼した。また、回答の秘密性を保持するために、返送は郵送により個別に回収し、質問紙の返送をもって同意とした。

質問紙は、個人の背景(所属教育機関・職位・臨床経験数・教育経験数など)と、教育能力(科目設計能力4項目、教授法能力4項目、カリキュラム設計能力6項目、学習者支援能力6項目、教育評価能力3項目)の計23項目から構成した。これらは、助産師教育に関わる6人の教員が、教員の能力に関する文献等^{9-10,15)}を検討し、教育能力項目を網羅するように作成した。また、質問紙は数名の助産師教員に対してプレテストを実施し、その内容や表現を精選した。

なお、各能力の回答は、能力が低い(1点)、やや低い(2点)、普通(3点)、やや高い(4点)、高い(5点)の5件法とし、得点が高いほど能力が高くなるように得点化した。

3. 調査期間

データ収集期間は、2011年10月5日～10月25日ま

全国助産師教育協議会
〒111-0054 東京都台東区鳥越2-12-2日本助産師会館3階
京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻母性看護・助産学分野
〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53
Midwifery & Women's Health, School of Human Health Science, Graduate School of Medicine, Kyoto University
* 京都府立医科大学看護学科
〒602-0857 京都市上京区清和院口寺町東入中御霊町410
Kyoto Prefectural University of Medicine
** 愛仁会看護助産専門学校助産学科
〒567-1117 高槻市天神町2丁目1番12号
Aijinkai Nursing Midwifery School
*** 神戸市看護大学
〒651-2103 兵庫県神戸市西区学園西町3丁目4
Kobe City College of Nursing
受稿日 2012年11月5日
受理日 2013年1月10日

での20日間である。

4. 分析方法

専門学校と大学系教育機関（短大専攻科・大学・大学専攻科・大学別科・大学院）は、教員採用の条件や教育目的などが異なるので、分けて分析した。なお、短大専攻科の教員は単独で分析するには対象数が少なかったこと、及び短期大学設置基準に定められている教員要件は大学設置基準の要件と類似しているため、大学系教育機関に分類した。専門学校と大学系教育機関に分けて基本統計を行い、職位、教育経験年数を独立変数、教育能力の素点を従属変数として一元配置分散分析、多重比較（Bonferroni法）を行った。また、教育能力は前述の5分類の得点と総合得点を求め、2群比較を行った。

5. 用語の操作的定義

本研究で用いた用語の操作的定義は、以下のとおりである。

専門学校：短期大学専攻科・大学・大学別科・大学専攻科・大学院以外の助産師養成校で1年課程の教育機関を指す。**実習調整者**：看護師養成所の運営に関する指導要領（第四の3）の要件を満たし、臨地実習全体の計画の作成、実習施設との調整等を行う者を指す。

教育能力：教員の総合的教育能力を指し、本稿では科目設計能力、教授法能力、カリキュラム設計能力、学習者支援能力、教育評価能力の5分類からみた能力とする。

6. 倫理的配慮

依頼文書に研究趣旨、無記名、プライバシーの保護、参加の自由と途中離脱の自由、個人や教育機関が特定できない形での公表、得られたデータは研究目的以外には使用せず、終了後は全て破棄することなどを

記載した。

結 果

1. 対象の特性

表1は対象の所属助産師教育機関、表2は対象の属性である。238名の内、専門学校71名（29.8%）、大学系167名（70.2%）であった。専門学校では専任教員が最も多く、大学系では職位別にはほぼ均等に分かれた。全体では年齢46.9±9.2歳、臨床経験10.3±5.7年、助産師としての教育経験7.2±5.9年で、大学系教育機関の助産師教員は専門学校の助産師教員よりも年齢は有意に高く、臨床経験は短い傾向が認められた。教育経験では助産師教育及び看護師教育の経験ともに、大学系教育機関の助産師教員が有意に長かった。

2. 教育機関別教育能力

1) 専門学校の教員の教育能力

専門学校に勤務する教員の教育能力を表3に示した。専任教員は教育能力の全項目で最も低値で、学習者支援能力の4項目を除いて、3点（普通）以下を示した。特にカリキュラム設計能力及び教育評価能力は、平均2.5以下と低値であった。実習調整者と教務主任はほぼ同値で、科目設計能力・カリキュラム設計能力・教育評価能力は教務主任が、教授法能力・学習者支援能力は実習調整者が高値の項目が多かった。また、専任教員の教授法能力、カリキュラム設計能力、教育評価能力の得点はほぼ全項目で、実習調整者又は教務主任よりも有意に低値を示した。

2) 大学系教育機関の教員の教育能力

大学系教育機関に勤務する教員の教育能力を表4に示した。全項目において、助手・助教、講師・准教授、教授の順に得点が高くなり、3群間に有意な差が

表1 所属助産師教育機関

種別	n (%)	内訳
専門学校(1年課程)	71 (29.8)	専任教員42名、実習調整者10名、教務主任17名、不明2名 助手13名、助教41名 講師27名、准教授39名 教授45名、不明2名
短期大学専攻科	8 (3.4)	
大学選択課程	98 (41.2)	
大学専攻科・別科	31 (13.0)	
大学院	30 (12.6)	
合計	238 (100.0)	

注) 実習調整者とは臨地実習全体の計画の作成、実習施設との調整等を行う者

表2 対象の属性

項目	mean±SD			p値 (専門 VS 大学系)
	全体 n=238	専門学校 n=71	大学系教育機関 n=167	
年齢(歳)	46.9±9.2	45.3±6.8	47.5±10.0	0.046*
臨床経験(年)	10.3±5.7	11.3±4.9	9.8±6.0	0.059
教育経験 助産師教育(年)	7.2±5.9	5.8±5.0	7.8±6.2	0.011*
看護師教育(年)	8.6±7.3	5.9±4.8(n=38)	9.4±7.7(n=132)	0.001***

注) 教育経験で助産師教育と看護師教育が重複している場合は、助産師教育に含めた。

*p<0.05, ***p<0.001

表3 専門学校での教育能力

項目	内容	職位	n	Mean	SD	F 値	p 値	多重比較
科目設計能力	学習者の準備状態やニーズを把握して内容を組み立てる能力	1. 専任教員	42	2.74	.73	6.63	.002	1<2,1<3
		2. 実習調整者	10	3.40	.52			
		3. 教務主任	17	3.41	.87			
	最新の知見や社会情勢を反映させた内容を組み入れる能力	1. 専任教員	42	2.88	.86	3.26	.045	
		2. 実習調整者	10	3.30	.67			
		3. 教務主任	17	3.41	.62			
	科学的根拠に基づいた内容を組み入れる能力	1. 専任教員	42	2.98	.64	3.11	.051	
		2. 実習調整者	10	3.40	.52			
		3. 教務主任	17	3.35	.70			
	学習成果が自己評価できるような内容を組み入れる能力	1. 専任教員	42	2.60	.70	2.43	.096	
		2. 実習調整者	10	2.90	.57			
		3. 教務主任	17	3.00	.71			
教授法能力	学習者数や授業内容に最適な授業方法を選択し実施する能力	1. 専任教員	42	2.83	.76	5.51	.006	1<2
		2. 実習調整者	10	3.60	.52			
		3. 教務主任	16	3.25	.68			
	科目内容に合わせた教材・教具を選択し、実施する能力	1. 専任教員	42	2.93	.68	8.45	.001	1<2
		2. 実習調整者	10	3.80	.42			
		3. 教務主任	15	3.33	.62			
	事前学習等、学習者のレディネス状態に応じた教授方法を実施する能力	1. 専任教員	41	2.80	.68	9.38	.000	1<2,1<3
		2. 実習調整者	10	3.60	.52			
		3. 教務主任	16	3.44	.63			
	クリティカルシンキング、内省等を用いた双方向・参加型の授業を展開する能力	1. 専任教員	41	2.56	.81	4.53	.014	
		2. 実習調整者	10	2.80	.63			
		3. 教務主任	16	3.25	.77			
カリキュラム設計能力	各教育機関の理念に基づいたカリキュラムを設計する能力	1. 専任教員	41	2.49	.78	7.64	.001	1<2,1<3
		2. 実習調整者	10	3.20	.42			
		3. 教務主任	16	3.25	.86			
	学習者が、助産師としてのアイデンティティを育成できるようにカリキュラムを設計する能力	1. 専任教員	42	2.50	.83	5.98	.004	1<2,1<3
		2. 実習調整者	10	3.20	.79			
		3. 教務主任	17	3.18	.73			
	学習者が、自己学習できるようにカリキュラムを設計する能力	1. 専任教員	42	2.48	.74	4.58	.014	1<3
		2. 実習調整者	10	3.00	.47			
		3. 教務主任	17	3.00	.71			
	学習者が、体系的に学べるようにカリキュラムを設計する能力	1. 専任教員	42	2.52	.83	5.85	.005	1<3
		2. 実習調整者	10	3.20	.42			
		3. 教務主任	17	3.18	.81			
学習者が、知識、技術を習得できるようにカリキュラムを設計する能力	1. 専任教員	42	2.62	.85	8.10	.001	1<2,1<3	
	2. 実習調整者	10	3.30	.48				
	3. 教務主任	17	3.41	.62				
学習者が卒業後も助産師として継続学習能力を育成できるようにカリキュラムを設計する能力	1. 専任教員	42	2.50	.89	4.44	.016	1<3	
	2. 実習調整者	10	3.10	.57				
	3. 教務主任	17	3.06	.56				
学習者支援能力	学習者にとって適切な学習環境を整備する能力	1. 専任教員	42	2.95	.70	3.17	.049	
		2. 実習調整者	10	3.50	.53			
		3. 教務主任	17	3.24	.66			
	“共におこなう”の精神で教員と学習者が共に成長できるような関係を構築する能力	1. 専任教員	42	3.19	.63	5.75	.005	1<2
2. 実習調整者	10	3.90	.74					
		3. 教務主任	16	3.63	.72			

項目	内容	職位	n	Mean	SD	F 値	p 値	多重比較
学習者支援能力	同じ助産師をめざす仲間として学習者に関わり、支援する能力	1. 専任教員	41	3.41	.63	5.28	.008	1<2
		2. 実習調整者	10	4.10	.57			
		3. 教務主任	16	3.75	.68			
	学習者の知的成長と人間的成長の両面から支援する能力	1. 専任教員	41	3.17	.63	2.99	.057	
		2. 実習調整者	10	3.60	.70			
		3. 教務主任	16	3.56	.73			
	学生生活や課外活動等を支援する能力	1. 専任教員	41	3.00	.59	.10	.909	
		2. 実習調整者	10	3.10	.57			
		3. 教務主任	17	3.06	1.03			
	学習者が修学に必要な支援をマネジメントする能力	1. 専任教員	42	2.64	.76	7.81	.001	1<3
		2. 実習調整者	10	3.10	.74			
		3. 教務主任	17	3.47	.72			
教育評価能力	カリキュラムを評価する能力	1. 専任教員	42	2.43	.67	11.02	.000	1<3
		2. 実習調整者	10	3.00	.67			
		3. 教務主任	17	3.29	.69			
	教育評価をフィードバックし修正する能力	1. 専任教員	42	2.43	.63	12.18	.000	1<3
		2. 実習調整者	10	3.00	.67			
		3. 教務主任	17	3.35	.79			
適時に第三者評価を受けるのに必要な準備をする能力	1. 専任教員	42	2.19	.74	5.22	.008	1<3	
	2. 実習調整者	10	2.80	.79				
	3. 教務主任	17	2.82	.88				

注) 一元配置分散分析, 多重比較 (Bonferroni 法), 3 (普通) 未満と3以上を網掛けで区別

認められた。助手・助教の教育能力は学習者支援能力の項目、及び科目設計能力の「科学的根拠に基づいた内容を組み入れる能力」を除く全項目で2.5以下を示し、特にカリキュラム設計能力、教育評価能力の全項目で2未満（やや低い）であった。また、教育能力の全項目において、大学系の助手・助教の得点は、専門学校の専任教員よりも低値を示した。

3) 教育経験年数別の教育能力

教育経験年数別の教育能力は、表5の如く23項目ともに経験年数が増すに従って得点が上昇した。科目設計能力、教授法能力、カリキュラム設計能力は、3年目又は5年目とそれ以上の間で3点（普通）以下と以上に分かれた。学習者支援能力は、「学生生活や課外活動等を支援する能力」は3年目、「学習者が修学に必要な支援をマネジメントする能力」は5年目で普通か否かに線引きできたが、他の項目については1～2年目で3未満・以上に分類され、経験年数2年程度の早い段階で標準に達していた。一方、教育評価能力は5年目及び10年目で3（普通）未満・以上で線引きができ、5分類の能力の中では最も長い経験年数を必要としていた。また、21年目以上の経験者は、4（やや高い）以上の得点を示す項目が9項目（科目設計能力2、教授法能力3、カリキュラム設計能力1、学習者支援能力3）あり、全般において高い能力を示した。

4) 専門学校と大学系教育機関の教育能力得点の比較
表6は専門学校と大学系教育機関の教員の各教育能力別得点の比較である。5分類の能力及び総合得点ともに、大学系の教員が僅かに高値を示したが、2群間に差はなかった。

5) 臨床・教育経験と教育能力得点の関係

表7は、臨床・教育経験年数と教育能力得点の相関を示したものである。専門学校・大学系ともに、助産師としての臨床経験と教育総合得点間に関連性はなかったが、助産師としての教育経験と教育総合得点の間には中程度の有意な正の相関が認められ、全体では $r=0.482$ ($p<0.001$) であった。

考 察

1. 教育機関別の教育能力

専門学校の専任教員及び大学系教育機関の助手・助教は、学習者支援能力の一部、科目設計能力・教授法能力・カリキュラム設計能力・教育評価能力の全項目で標準以下の能力を示した。特に大学系の助手・助教は、教育能力の全項目で、専任教員よりも低値を示し注目された。これは、専門学校においては看護教員の質の平準化のために、専任教員養成講習会実施要領の受講対象者の要件として、「保健師、助産師又は看護師として5年以上業務に従事した者で、講習会終了後看護教育に従事する者」とされ、一定の臨床経験を積

表4 大学系教育機関の教育能力

項目	内容	職位	n	Mean	SD	F 値	p 値	多重比較
科目設計能力	学習者の準備状態やニーズを把握して内容を組み立てる能力	1. 助手・助教	54	2.44	1.11	32.49	.000	1<2<3
		2. 講師・准教授	65	3.31	.61			
		3. 教授	45	3.76	.71			
	最新の知見や社会情勢を反映させた内容を組み入れる能力	1. 助手・助教	54	2.37	1.01	43.19	.000	1<2<3
		2. 講師・准教授	66	3.52	.75			
		3. 教授	45	3.80	.69			
	科学的根拠に基づいた内容を組み入れる能力	1. 助手・助教	54	2.63	1.10	24.59	.000	1<2<3
		2. 講師・准教授	66	3.59	.76			
		3. 教授	45	3.76	.77			
	学習成果が自己評価できるような内容を組み入れる能力	1. 助手・助教	54	2.30	1.00	22.14	.000	1<2<3
		2. 講師・准教授	65	3.05	.78			
		3. 教授	45	3.36	.65			
教授法能力	学習者数や授業内容に最適な授業方法を選択し実施する能力	1. 助手・助教	54	2.31	1.10	32.6	.000	1<2<3
		2. 講師・准教授	66	3.24	.79			
		3. 教授	45	3.73	.78			
	科目内容に合わせた教材・教具を選択し、実施する能力	1. 助手・助教	54	2.48	1.13	26.43	.000	1<2<3
		2. 講師・准教授	66	3.32	.77			
		3. 教授	45	3.73	.69			
	事前学習等、学習者のレディネス状態に応じた教授方法を実施する能力	1. 助手・助教	54	2.26	1.03	34.59	.000	1<2,1<3
		2. 講師・准教授	66	3.26	.79			
		3. 教授	45	3.56	.59			
	クリティカルシンキング、内省等を用いた双方向・参加型の授業を展開する能力	1. 助手・助教	54	2.07	1.04	27.94	.000	1<2,1<3
		2. 講師・准教授	66	3.15	1.04			
		3. 教授	45	3.40	.72			
カリキュラム設計能力	各教育機関の理念に基づいたカリキュラムを設計する能力	1. 助手・助教	54	1.80	.88	67.78	.000	1<2<3
		2. 講師・准教授	66	2.98	.81			
		3. 教授	45	3.73	.84			
	学習者が、助産師としてのアイデンティティを育成できるようにカリキュラムを設計する能力	1. 助手・助教	54	1.91	1.03	48.94	.000	1<2<3
		2. 講師・准教授	66	3.12	.90			
		3. 教授	44	3.73	.87			
	学習者が、自己学習できるようにカリキュラムを設計する能力	1. 助手・助教	54	1.83	.93	59.18	.000	1<2<3
		2. 講師・准教授	66	3.12	.85			
		3. 教授	45	3.58	.72			
	学習者が、体系的に学べるようにカリキュラムを設計する能力	1. 助手・助教	53	1.85	.93	61.27	.000	1<2<3
		2. 講師・准教授	66	3.14	.88			
		3. 教授	44	3.68	.71			
学習者が、知識、技術を習得できるようにカリキュラムを設計する能力	1. 助手・助教	54	1.85	.90	71.85	.000	1<2<3	
	2. 講師・准教授	66	3.18	.84				
	3. 教授	45	3.80	.76				
学習者が卒業後も助産師として継続学習能力を育成できるようにカリキュラムを設計する能力	1. 助手・助教	54	1.80	.90	58	.000	1<2<3	
	2. 講師・准教授	66	2.82	.88				
	3. 教授	45	3.69	.85				
学習者にとって適切な学習環境を整備する能力	1. 助手・助教	53	2.64	.88	18.56	.000	1<2<3	
	2. 講師・准教授	66	3.23	.78				
	3. 教授	45	3.60	.69				
“共におこなう”の精神で教員と学習者が共に成長できるような関係を構築する能力	1. 助手・助教	54	2.78	.95	18.41	.000	1<2,1<3	
	2. 講師・准教授	65	3.54	.85				
	3. 教授	45	3.73	.72				

項目	内容	職位	n	Mean	SD	F 値	p 値	多重比較
学習者支援能力	同じ助産師をめざす仲間として学習者に関わり、支援する能力	1. 助手・助教	54	3.19	.91	13.36	.000	1<2,1<3
		2. 講師・准教授	66	3.83	.85			
		3. 教授	45	4.00	.77			
	学習者の知的成長と人間的成長の両面から支援する能力	1. 助手・助教	54	2.87	.93	15.74	.000	1<2,1<3
		2. 講師・准教授	65	3.58	.95			
		3. 教授	45	3.78	.64			
	学生生活や課外活動等を支援する能力	1. 助手・助教	54	2.56	1.09	8.92	.000	1<2,1<3
		2. 講師・准教授	66	3.06	.94			
		3. 教授	45	3.33	.71			
	学習者が修学に必要な支援をマネジメントする能力	1. 助手・助教	54	2.39	1.04	19.6	.000	1<2,1<3
		2. 講師・准教授	65	3.12	.93			
		3. 教授	44	3.48	.59			
教育評価能力	カリキュラムを評価する能力	1. 助手・助教	54	1.87	.93	48.44	.000	1<2<3
		2. 講師・准教授	66	2.89	.81			
		3. 教授	45	3.51	.79			
	教育評価をフィードバックし修正する能力	1. 助手・助教	54	1.98	.96	47.27	.000	1<2<3
		2. 講師・准教授	66	3.11	.86			
		3. 教授	45	3.64	.80			
適時に第三者評価を受けるのに必要な準備をする能力	1. 助手・助教	54	1.80	.88	48.09	.000	1<2<3	
	2. 講師・准教授	66	2.68	.79				
	3. 教授	45	3.51	.97				

注) 一元配置分散分析, 多重比較 (Bonferroni 法), 3 (普通) 未満と3以上を網掛けて区別

んだ者が教師としての必要な知識 (看護教育の基盤, 教育原理・方法・評価等の教育の基盤, 看護学の教授に関する理論等855時間) を学んで教員となる。一方, 大学系の教員ではそのような制限がなく, 教員の採用は各々の教育機関に任されており, 教員として最低限必要な臨床能力や教育を行うための基礎知識がバラバラの状態, 時には臨床経験や看護教育学の知識が極めて乏しい状況で採用されているためと推測される。

また, 助手・助教は, 5分類の教育能力の中では, 特にカリキュラム設計能力, 教育評価能力の全項目において2未満 (やや低い) を示した。これは専門学校では教員数が少ないために, 専任教員であってもカリキュラム設計の一端を担い, 教育評価も実施するなど教育の全課程に軽重はあっても何らかの関与をせざるをえない現状がある, またはそれらを実施する教員の手伝いや見学などの機会があると考えられるが, 大学系教育機関では前述の如く教育学の基礎的知識が不十分なことに加えて, 教育における役割分担が明確で, 助手・助教は実習中心の業務となっており, カリキュラムの一部或いは全部を設計する役割や教育評価はほとんど担っていないためと考えられる。

2. 教育経験年数別の教育能力

専門学校・大学系ともに, 教育経験年数と教育能力総合得点間で中程度の有意な正の相関を示した。個別の項目毎に見ても, 教育経験年数が増すに従って全項

目の得点が上昇した。特に学習者支援能力については, 「学生生活や課外活動等を支援する能力」「学習者が修学に必要な支援をマネジメントする能力」を除いて, ほぼ2年目から標準以上の得点を示した。また, 専門学校の専任教員および大学系の助手・助教ともに, 教育能力5分類の中でも学習者支援能力は最も良好で, 標準前後の点数を示した。これは, 指定規則で分娩介助例数10例程度と定められている助産師教育においては, カリキュラムが過密で, 夜間実習や土日の実習などを行うことが多いために, 専門学校だけでなく, 大学系教育機関においても, 講義や実習だけでなく, 学生の日常生活に対する指導や学生からの相談を受けるなど, 様々なことに時間を費やしており, 学生と教員の関係性が緊密となるためと推測される。このことは, 学習者支援能力得点が大学系教員の方が僅かではあるが高いことから裏付けられる。

教員に求められる資質能力として, 初等中等教育では人間の成長・発達についての深い理解, 幼児・児童・生徒に対する教育的愛情等が挙げられている (文部科学省初等中等教育局, 平成9年7月28日)。また, 今後の看護教育のあり方に関する検討会報告書でも, 向上すべき資質として, 「対人関係における自己の表現や相手に対する理解」「多様な個性を尊重する人権意識や倫理観, 看護に対する価値観」「人として, 看護職として学生等の目標となることができる人間

表5 教育経験年数別教育能力

項目	内容	職位	n	Mean	SD	p 値	多重比較
科目設計能力	学習者の準備状態やニーズを把握して内容を組み立てる能力	1.1年	39	2.28	1.02	.000	1<4,5,6,7,8 2<5,6 3<5,6 4<5
		2.2年	29	2.79	.86		
		3.3年	14	2.64	.74		
		4.4-5年	39	2.92	.77		
		5.6-10年	64	3.52	.71		
		6.11-15年	27	3.56	.58		
		7.16-20年	19	3.53	.96		
		8.21年以上	6	3.83	.75		
	最新の知見や社会情勢を反映させた内容を組み入れる能力	1.1年	39	2.51	1.14	.000	1<5,6,7,8
		2.2年	29	2.86	.92		
		3.3年	14	2.86	.95		
		4.4-5年	39	3.10	.88		
		5.6-10年	64	3.50	.84		
		6.11-15年	28	3.46	.69		
		7.16-20年	19	3.47	.84		
		8.21年以上	6	4.00	.89		
	科学的根拠に基づいた内容を組み入れる能力	1.1年	39	2.49	1.02	.000	1<4,5,6,7,8
		2.2年	29	3.10	.98		
3.3年		14	2.93	1.00			
4.4-5年		39	3.18	.64			
5.6-10年		64	3.63	.77			
6.11-15年		28	3.57	.79			
7.16-20年		19	3.47	.84			
8.21年以上		6	4.00	.89			
教授法能力	学習成果が自己評価できるような内容を組み入れる能力	1.1年	39	2.10	.85	.000	1<4,5,6,7,8
		2.2年	29	2.69	.85		
		3.3年	14	2.50	.94		
		4.4-5年	39	2.85	.84		
		5.6-10年	63	3.08	.73		
		6.11-15年	28	3.29	.71		
		7.16-20年	19	3.05	.71		
		8.21年以上	6	3.33	.82		
	学習者数や授業内容に最適な授業方法を選択し実施する能力	1.1年	39	2.18	1.02	.000	1<4,5,6,7,8 2<5,6,8 3<5,6,8
		2.2年	28	2.71	.90		
		3.3年	14	2.64	.93		
		4.4-5年	39	2.97	.78		
		5.6-10年	64	3.42	.83		
		6.11-15年	28	3.57	.79		
		7.16-20年	19	3.47	.61		
		8.21年以上	6	4.00	.89		
	科目内容に合わせた教材・教具を選択し、実施する能力	1.1年	39	2.28	.97	.000	1<4,5,6,7,8 2<5,6,7,8
		2.2年	28	2.79	.92		
3.3年		14	3.00	.88			
4.4-5年		39	3.18	.76			
5.6-10年		64	3.38	.77			
6.11-15年		28	3.64	.78			
7.16-20年		18	3.61	.70			
8.21年以上		6	4.17	.41			
事前学習等、学習者のレディネス状態に応じた教授方法を実施する能力	1.1年	39	2.26	.99	.000	1<4,5,6,7,8 2<5,6,7,8 3<5,6,7,8	
	2.2年	28	2.61	.88			
	3.3年	14	2.50	.85			
	4.4-5年	38	2.92	.71			
	5.6-10年	64	3.41	.81			
	6.11-15年	28	3.36	.56			
	7.16-20年	19	3.58	.61			
	8.21年以上	6	4.00	.63			
カリキュラム設計能力	クリティカルシンキング、内省等を用いた双方向・参加型の授業を展開する能力	1.1年	39	2.13	.92	.000	1<5,6,7 2<5,6,7
		2.2年	28	2.43	.96		
		3.3年	14	2.57	1.02		
		4.4-5年	38	2.74	.89		
		5.6-10年	64	3.13	1.09		
		6.11-15年	28	3.29	.76		
		7.16-20年	19	3.37	.90		
		8.21年以上	6	3.33	.82		
	各教育機関の理念に基づいたカリキュラムを設計する能力	1.1年	38	1.97	.88	.000	1<5,6,7,8 2<6,7,8 4<6,8
		2.2年	28	2.46	1.07		
		3.3年	14	2.57	1.02		
		4.4-5年	39	2.59	.97		
		5.6-10年	64	3.00	.91		
		7.16-20年	19	3.37	.96		
		8.21年以上	6	4.00	1.10		
		助産師としてのアイデンティティを育成できるようにカリキュラムを設計する能力	1.1年	39	2.05		
	2.2年		29	2.41	.91		
	3.3年		14	2.29	.83		
4.4-5年	39		2.69	1.03			
5.6-10年	64		3.13	1.00			
6.11-15年	27		3.41	1.01			
7.16-20年	19		3.63	1.07			
8.21年以上	6		3.83	1.17			
学習者が、自己学習できるようにカリキュラムを設計する能力	1.1年	39	1.95	.83	.000	1<4,5,6,7,8 2<5,6,7 3<5,6,7,8	
	2.2年	29	2.45	.91			
	3.3年	14	2.14	.77			
	4.4-5年	39	2.64	.84			
	5.6-10年	64	3.13	.93			
	6.11-15年	28	3.32	.94			
	7.16-20年	19	3.42	.90			
	8.21年以上	6	3.50	.84			
学習者が、体系的に学べるようにカリキュラムを設計する能力	1.1年	38	1.97	.85	.000	1<4,5,6,7,8 2<6 3<6,7,8	
	2.2年	29	2.55	1.06			
	3.3年	14	2.36	1.01			
	4.4-5年	38	2.71	.93			
	5.6-10年	64	3.13	.92			
	6.11-15年	28	3.36	.99			

項目	内容	職位	n	Mean	SD	p 値	多重比較	
カリキュラム設計能力	学習者が、知識、技術を習得できるようにカリキュラムを設計する能力	7.16-20年	19	3.42	.90	.000	1<4,5,6,7,8 2<5,6,7,8 3<6,7,8	
		8.21年以上	6	3.83	.98			
		1.1年	39	1.95	.83			
		2.2年	29	2.48	.99			
		3.3年	14	2.50	.94			
		4.4-5年	39	2.79	.92			
	助産師として継続学習能力を育成できるようにカリキュラムを設計する能力	5.6-10年	64	3.28	.93			
		6.11-15年	28	3.5	.88			
		7.16-20年	19	3.53	.96			
		8.21年以上	6	3.83	.98			
		1.1年	39	1.97	.87			
		2.2年	29	2.34	1.01			
	学習者にとって適切な学習環境を整備する能力	学習者にとって適切な学習環境を整備する能力	3.3年	14	3.07	.83	.000	1<5,6,7,8 2<5,7,8 4<8
			4.4-5年	39	3.00	.76		
			5.6-10年	63	3.33	.72		
			6.11-15年	28	3.39	.57		
			7.16-20年	19	3.47	.70		
			8.21年以上	6	4.17	.75		
教員と学習者が共に成長できるような関係を構築する能力		1.1年	38	2.82	.98	.000	1<5,6,7	
		2.2年	28	3.07	.98			
		3.3年	14	3.00	.88			
		4.4-5年	39	3.31	.77			
		5.6-10年	64	3.58	.77			
		6.11-15年	28	3.68	.72			
学習者支援能力		同じ助産師をめざす仲間として学習者に関わり、支援する能力	7.16-20年	19	3.74	.81	.000	1<5,6,7 2<7
			8.21年以上	6	3.67	.82		
			1.1年	39	3.10	.82		
			2.2年	28	3.36	.87		
			3.3年	14	3.43	.65		
			4.4-5年	39	3.51	.76		
	学習者の知的成長と人間的成長の両面から支援する能力	5.6-10年	63	3.92	.81	.000	1<5,6,7,8	
		6.11-15年	28	3.86	.76			
		7.16-20年	19	4.16	.76			
		8.21年以上	6	4.00	.89			
		1.1年	39	2.77	.93			
		2.2年	28	3.14	.89			
	カリキュラムを評価する能力	学生生活や課外活動等を支援する能力	3.3年	14	3.21	.70	.002	1<6
			4.4-5年	39	3.21	.73		
			5.6-10年	63	3.67	.82		
			6.11-15年	28	3.64	.62		
			7.16-20年	18	3.83	.79		
			8.21年以上	6	4.17	.75		
学習者が修学に必要な支援をマネジメントする能力		1.1年	38	2.37	.91	.000	1<5,6,7 2<6,7	
		2.2年	29	2.62	1.01			
		3.3年	14	2.71	.91			
		4.4-5年	39	2.77	.87			
		5.6-10年	64	3.19	.87			
		6.11-15年	28	3.36	.73			
教育評価能力		カリキュラムを評価する能力	7.16-20年	18	3.50	.79	.000	1<5,6,7,8 2<6,7
			8.21年以上	6	3.50	.84		
			1.1年	39	2.03	.90		
			2.2年	29	2.48	.95		
			3.3年	14	2.29	.91		
			4.4-5年	39	2.54	.94		
	教育評価をフィードバックし修正する能力	5.6-10年	64	2.92	.86	.000	1<5,6,7,8 3<6,8	
		6.11-15年	28	3.29	.76			
		7.16-20年	19	3.26	.81			
		8.21年以上	6	3.83	1.17			
		1.1年	39	2.08	.90			
		2.2年	29	2.59	1.02			
	適時に第三者評価を受けるのに必要な準備をする能力	3.3年	14	2.36	.93	.000	1<5,6,8 2<6,8 3<6,8 4<6	
		4.4-5年	39	2.62	.91			
		5.6-10年	64	3.17	.92			
		6.11-15年	28	3.32	.77			
		7.16-20年	19	3.32	.95			
		8.21年以上	6	3.83	1.17			

注) 一元配置分散分析、多重比較 (Bonferroni 法)、3 (普通) 未満と3以上を網掛けで区別

表6 教育能力の得点比較

各教育能力	専門学校		大学系教育機関		p(t 値)
	n	Mean ± SD	n	Mean ± SD	
科目設計能力	70	11.9 ± 2.6	164	12.6 ± 3.5	.109
教授法能力	68	11.9 ± 2.7	166	12.1 ± 3.8	.687
カリキュラム設計能力	69	16.6 ± 4.5	163	17.0 ± 6.4	.583
学習者支援能力	67	19.3 ± 3.4	161	19.5 ± 4.8	.845
教育評価能力	70	7.8 ± 2.2	166	8.2 ± 3.0	.271
総合得点	64	67.5 ± 13.8	156	69.1 ± 19.5	.491

注) 2群の母平均値の差の検定：ns(not significant)

表7 臨床・教育経験年数と教育総合得点の相関係数

項目	全体	教育能力総合得点 専門学校	大学系教育機関
助産師としての臨床経験年数	n=236 0.062	n=70 -0.181	n=166 0.131
助産師としての教育経験年数	n=220 0.482***	n=64 0.400**	n=156 0.503***

注) ピアソン積率相関係数, **p<0.01, ***p<0.001

性」が挙げられている。さらに、教育大学大学院修了者を対象にした調査でも、特に重要だと思う教員の資質能力は「教育への情熱」「生徒指導の能力」「子どもの心情を理解し共感する能力」「幅広い社会性・人間性」等であったと報告している⁶⁾。このことは、初等・中等・高等教育機関ともに、学生の理解と指導に関する能力、学生と教員の相互関係、人間関係・社会性に関する能力は、教員として備えなければならない基本的な能力であることを示すものである。

次に、科目設計能力や教授法能力について見ると、遠藤¹⁰⁾は3～5年目を一人前教員と位置づけ、基本的な授業設計ができる能力や学習者のニーズを理解して授業内容や授業方法の工夫ができるレベルとしている。本調査でも科目設計能力や教授法能力は3年あるいは5年以上で標準の得点を示しており、科目設計や教授法が自在にできるようになるには、3～5年以上の教育経験を有する必要があると推測される。

さらに、カリキュラム設計能力や教育評価能力では、標準以上の得点を示すのは5年以上あるいは10年以上の経験を要し、一般的な教育能力が身につくには10年以上の経験が必要という結果であった。遠藤¹⁰⁾は、6～10年経験者を中堅教員として、教育課程の編成が可能となり、自分の授業を分析的に評価できるレベルとしているが、本調査でもカリキュラム設計能力は6～10年で標準レベルに達し、ほぼ同様の結果を示した。教育評価能力のうちのカリキュラム評価能力や第三者評価を受けるための準備能力などは11年以上を要しており、より長い年数を必要とする結果であった。また、遠藤¹⁰⁾は11年以上を熟達教員としているが、本調査では21年以上になると6項目で4点以上の高得点を示した。すなわち、最新の知見や社会情勢を反映させた内容を組み入れる能力、各教育機関の

理念に基づいたカリキュラムを設計する能力、学習者に適切な学習環境を整備する能力等はより高次の責任ある立場において実施可能な教育能力であり、このような卓越した能力を示すためにはより長い経験年数が必要であると考えられる。

3. 助産師教員に関する教育実践能力習熟段階

本調査では標準的能力を示す教育年数は、学習者支援能力は1～3年目の初心者、科目設計能力、教授法能力、カリキュラム設計能力、教育評価能力は10年程度の中堅者、高い能力をもつ熟達者になるためには20年以上を要するという結果であった。また、専門学校と大学系教育機関の間には、5分類の能力得点及び総合得点に差はなかった。教員に関する教育実践能力習熟段階について、遠藤¹⁰⁾は専任教員のキャリア別達成目標として、「新人教員：1～2年」、「一人前教員：3～5年」、「中堅教員：6～10年」、「熟達教員：11年以上」を提案し、吉崎¹⁷⁾は教師の生涯発達を、「初心期：教職3年目ぐらいまで」、「中堅期：教職5年目から15年目ぐらいまで」、「熟練期：20年目以降」の3段階で捉えている。本調査では5分類の教育能力の達成については遠藤の分類に類似し、熟達レベルについては吉崎の分類に類似の結果を示した。遠藤の分類は看護の専任教員に関するもので、また調査結果に基づいたものではない。吉崎¹⁷⁾の分類は一般の教師についてのものであり、単純に助産師教員の教育能力と比較することはできないが、教師としての標準的能力に達するには、同程度の経験年数が必要であるといえよう。今後は、本調査で用いた23項目を精選するために、十分な経験を有する助産師教員を対象にデルファイ調査を実施し、助産師教員のための教育実践能力習熟段階を構築することが重要である。

また、大学系の助手・助教の教育能力は学習者支援

能力の1項目を除き、全項目において標準以下であった。これは教育機関別の教育能力の箇所でも既述した要因が大きいのと思われる。今後、大学系教育機関の教員においては、大学院で看護教育学などを履修せずに教員になった者に対しては、少なくとも専任教員が受講するような看護教育の基盤、教育原理・方法・評価等の教育の基盤、看護学の教授に関する理論等は教授する必要がある。各教員のレディネスを把握して、教育学の基礎的知識・技術を習得するためのFDや研修会等の実施が極めて重要である。

結 論

専門学校と大学系教育機関の助産師教員の教育能力には差がなく、いずれも5分類の教育能力が標準以上を示すのは、5～10年以上必要であることが示された。5分類の教育能力のうちでは学習者支援能力が1～2年目と最も早くから標準に達する能力であり、教員としての基礎的能力であると考えられた。また、カリキュラム設計能力や教育評価能力の全てが標準に達するのは11年以上、熟達者となるには21年以上の教育経験が必要であることが示され、各教育能力別の詳細な教育実践能力習熟段階の構築が必要と思われる。

さらに、大学系教育機関の助手・助教の教育能力は専任教員よりも全ての項目で低く、しかも標準を示したのは僅か1項目であり、教育能力の低さが際立っていた。大学系教育機関に働く教員には、専門学校の教員と異なり、助産師教員となるための明確な基準は定められていないことが主原因と考えられることから、大学系教育機関においては教員採用の明確な基準化、及び教員採用後に新任教員に対して教育学の知識等を教授するための研修制度の導入が急がれる。

なお、本調査では教育能力と臨床経験の間に関連は認められなかったが、今後は分娩取扱件数や高次機能病院での勤務等の臨床経験のより詳細な内容の検討、及び教員の教育能力の評価指標としては助産師学生の初期実践能力や知識量等に関する就業先の評価も極めて重要であることから、評価指標の検討も実施し、多面的方向から教員の教育能力の精査を行いたい。

この調査は、全国助産師教育協議会組織小委員会で行った調査の一部である。最後に、調査に協力頂いた教員の皆様に深謝致します。

文 献

- 1) 日本看護協会出版会編：平成23年看護関係統計資料集，2012；84-85，東京，日本看護協会出版会
- 2) 日本看護協会調査報告書No.38：1991年看護教育調査，1993；86-99，東京，日本看護協会出版会
- 3) 厚生労働省：今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書，2010；1-8
- 4) 吉川雅文，長澤憲保，横川和章，他：教師に必要な資質能力に関する研究(1)－現職教員が認知する資質能力の要因とその構造の検討－，兵庫教育大学，1999；19：173-181
- 5) 横川和章，吉川雅文，浅川潔司，他：教師に必要な資質能力に関する研究(2)－重要視される資質能力と教師の属性による差異の検討－，兵庫教育大学，1999；19：183-188
- 6) 渡部洋子，相馬朝江，赤松弥生，他：臨地実習指導における教員の教育的省察－看護教員の実習指導能力向上の取り組み－，上武大学紀要，2010；4：47-55
- 7) 小笹美子，大塚真理子，北川真理子，他：大学教育における看護実践能力育成に関する現状と要素，看護教育，2010；51(10)：886-891
- 8) 平野加代子，清水房江，伊津美孝子：看護教員の職務成長におよぼす要因の認識モデルとなった看護教員の特性，三重看護学誌，2012；12：53-58
- 9) 遠藤由美子：専任教員の資質向上の方法論，看護教育，2009；50(3)：204-208
- 10) 遠藤由美子：専任教員の資質向上に向けた取り組み，看護教育，2008；49(8)：776-783
- 11) 有村優子：看護教員の資質の向上を目指した取り組み，IRYO，2009；63(10)：653-657
- 12) 石田佳代子：看護系大学の新任教員に対するFD推進のための文献調査に基づく課題，2010；9：10-18
- 13) 杉本 均：教員自身のためのティーチング・ポートフォリオ，看護教育，2007；48(1)：31-35
- 14) Allan H.: Mentoring overseas nurse: barriers to effective and non-discriminatory mentoring practices. Nurs Ethics. 2010; 17(5): 603-613
- 15) Drennan J.: Professional and academic destination of masters in nursing graduates: a national survey. Nurse Educ Today, 2008; 28(6): 751-758
- 16) 文部科学省：平成14年度科学技術の振興に関する年次報告，2003；p3
- 17) 吉崎静夫：一人立ちへの道筋，浅田匡，生田孝至，藤岡完治編：成長する教師，1998；162-173，東京，金子書房